関西版

人
まち
ブンカ

Power of BUNKA
at community

ブンカでつなぐ
人と時代とコミュニティ

平成26年度文化庁文化芸術振興費補助金
（文化資産を活かした地域活性化事業）

「まちのブンカ」を
これからのまちづくりに

CONTENTS

05

集 創 結 育

08 人が集まり、遊ぶ場所をつくるブンカ
坂州農村舞台（徳島県那賀町）
水口人形芝居（鳥取県八頭町）

14 人が楽しみ創造するブンカ
円通寺人形芝居（鳥取県鳥取市）
能勢人形浄瑠璃 鹿角座（大阪府能勢町）

20 人とまち、時代を結ぶブンカ
辺川神社農村舞台（徳島県那賀町）
義太夫節のおやじ制（大阪府能勢町）
新田人形浄瑠璃芝居相生文楽（鳥取県智頭町）

28 人のこころを豊かに育むブンカ
和知人形浄瑠璃（京都府京丹波町）
淡路人形浄瑠璃（兵庫県南あわじ市）

特集 1 コミュニティにおける ブンカの役割

34

まち のチカラ × ブンカ のチカラ

湯浅悦司氏（丹生谷清流座）
松田正弘氏（淨るりシアター館長）
中西英夫氏（南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館館長）

特集 2 『まちのブンカ』を 創る人たち

column

07 関西エリアの人形浄瑠璃マップ
13 徳島県の人形浄瑠璃
19 鳥取県の人形浄瑠璃
27 大阪府の人形浄瑠璃
33 京都府の人形浄瑠璃
41 関西ブンカのいま

コラム 関西エリアの 浄瑠璃ブンカ

43

みんなで考える
まちのブンカ会議

49

Check!

ブンカと地域を つなぐ

まちのブンカ会議 シンポジウム

これからますます進んでいく人口減少社会。
そんな時代を、楽しく豊かに暮らしていくために、
地域は独自の魅力を創造し、
新しいまちづくりに取り組んでいかなければなりません。
そのキーワードとなるのが『ブンカ（文化）』です。

どんなまちにも文化はあります。
その文化を見つめ直し、今の感性に合わせて変化していくことで、
新しい魅力や価値を生み出すことができます。
わたしたちはそれを『まちのブンカ』と表すことにしました。

この冊子は、関西各地の人形浄瑠璃にスポットをあて、
まちづくりにいかすことのできるヒントを
『集・創・結・育』の4つの視点からまとめたものです。
さらに、地域の文化資源を"これから"にいかす方策をさぐる
『まちのブンカ会議』を開催しました。

これからまちづくりをしていく方、地域で作品を創作するアーティスト、
そして、それを支える文化行政に携わる方。
それぞれの方が、それぞれの考え方で、
自分たちが暮らす『まちのブンカ』づくりにお役立ていただければ幸いです。

“

特集

コミュニティにおけるブンカの役割

関西各地に残る人形浄瑠璃

人形浄瑠璃は17世紀初めごろ、人形操りと三味線で伴奏する浄瑠璃の語りが結びついて、京都で生まれました。

18世紀に入ると竹本義太夫（浄瑠璃の語り手）と近松門左衛門（作家）の登場により、人気を獲得。大阪道頓堀では、竹本座と豊竹座が人気を競い、人形浄瑠璃は大衆の娯楽として全盛期を迎えます。

また、その前から淡路の多くの人形座が全国へ巡業、各地で公演をおこなっていました。

昭和に入り、映画やテレビが普及したため、人形浄瑠璃の人気は衰えましたが、今でも関西には地域の文化として、各地に人形浄瑠璃が伝承されてきました。

今回、「コミュニティにおけるブンカの役割」をテーマに、そんな関西各地に残る人形浄瑠璃にスポットをあて、まちづくりと地域の文化資源との関係を「集・創・結・育」の4つの視点から紹介します。

ブンカを考える4つのキーワード

集

まちにとって大切な、人が集まり、遊ぶ場所をつくるブンカの話

> P.08

創

まちにとって大切な、人が楽しみ創造するブンカの話

> P.14

結

まちにとって大切な、人とまち、時代を結ぶブンカの話

> P.20

育

まちにとって大切な、人のこころを豊かに育むブンカの話

> P.28

まちにとって大切なブンカのチカラ Ⅰ

集

人が集まり、遊ぶ場所をつくるブンカ

「自分たちが住むまちをもっと楽しくしたい」
神社の秋祭りにみんなが集い、会話を交わす、
人形芝居を娯楽として子どものように楽しむ。
ブンカには、”遊ぶ“”楽しむ“ための
「集う場」をつくるチカラがあります。
「集う」をキーワードに紹介するのは、
徳島県那賀町にある「坂州農村舞台」と
鳥取県八頭町の「水口人形芝居」。
さまざまな課題をかかえながらも、
楽しみながら活動を続ける、
2つのブンカを紹介します。

< P.09　坂州農村舞台／阿波人形浄瑠璃（徳島県那賀町）
< P.11　水口人形芝居／因幡文楽水口人形芝居保存会（鳥取県八頭町）

column

関西エリアの人形浄瑠璃マップ

**関西広域連合の対象とする関西エリアは、
人形浄瑠璃がさまざまなカタチで息づく地域。
それぞれの地域で多彩なブンカを育みながら歩んできました。**

鳥取県 Tottori

念力節（がんりきぶし）に合わせて舞う人形芝居・円通寺人形芝居（P15）や田園のまちに根付いた文化・水口人形芝居（P11）、むら全体で人間国宝の技を伝える新田人形浄瑠璃芝居相生文楽（P25）など、鳥取県内の人形浄瑠璃は、各地でさまざまな発展を遂げています。

兵庫県 Hyogo

ケレン味あふれる演出で時代をリードした、国指定重要無形民俗文化財・淡路人形浄瑠璃（P31）をはじめ、西宮神社の御神札を配りながら、えびす信仰を全国に広めた、人形操りの源流とも言える西宮のえびすかきなど、今もその歴史は兵庫県内に息づいています。

大阪府 Osaka

「おやじ制」（P23）という独自のシステムで約200年。太夫と三味線のみで演技者、人形を伴わない素浄瑠璃の文化が根付く能勢町では、地域の伝統を新しいまちのブンカ創造へと発展させる能勢人形浄瑠璃があります。

徳島県 Tokushima

大型で光沢のある塗りの人形を活かした、独自の操作法「阿波の手」を守り伝える、国指定重要無形民俗文化財・阿波人形浄瑠璃をはじめ、天秤棒で担いだ2つの木箱に人形数体を入れ、関東から九州まで全国各地に人形文化を伝えた、徳島独自の路傍の芸能・阿波木偶箱まわしなどがあります。

京都府 Kyoto

五穀豊穣を祈願し、祖霊の冥福を祈る4つの神社の合同祭礼として地域に残る、国指定重要無形民俗文化財の佐伯灯籠や、一人遣いで地域のオリジナル脚本を演じる、京都府指定無形民俗文化財・和知人形浄瑠璃（P29）など、地域の祭礼や行事とともに歩んでいます。

滋賀県 Shiga

滋賀県選択無形民俗文化財・冨田人形（P42）は、天保6年に発足。滋賀県長浜に興行に訪れた阿波の人形座が大雪に見舞われ興行できず、旅費として置いていった人形で稽古を始めたのが起源とされています。海外からの留学生の受け入れや、地域の小学生への普及活動も積極的に行っています。

SAKASHU NOSON BUTAI

坂州農村舞台

阿波人形浄瑠璃（徳島県那賀町）

NO.1

人と人のさまざまな関係をつくり続ける地域に欠かせないお祭り

集

「久しぶり！元気しとったん？」「よう帰ってきてたね！」
「お姉ちゃんの言うこと聞き！」飛び交う人びとの声。
懐かしい歌謡曲、宵闇に光る出店と提灯の光、みんなで見上げる花火…
坂州八幡神社の農村舞台は地域に欠かせない年に一度のお祭り。
1年ぶりに帰郷した友人や恩師との再会を喜ぶ人たち、
まだ小さい子どもをまとめる小学生のお姉ちゃん、お兄ちゃん、
お祭りの出店を切り盛りする青年団、若者たち、
人形浄瑠璃や芝居に手を叩いて喜ぶおじいちゃん、おばあちゃん。
子どもからお年寄りまで、さまざまな世代の方が、
このお祭りを舞台に、それぞれの交流や関係づくりが生まれています。

坂州農村舞台とは

坂州八幡神社の境内にある農村舞台。昭和53年に徳島県文化財、平成10年に国指定重要有形民俗文化財に指定。明治時代の建築とされる、徳島県内でも最も古い舞台のひとつ。平成26年は11月22日（土）に開催された坂州八幡神社秋祭りの余興として、坂州若連中による襖からくりと、木沢芸能振興会による恵比須舞、丹生谷清流座（P35）による人形浄瑠璃が披露されました。

☎ 那賀町木沢支所（0884-65-2111）

なぜ浄瑠璃というブンカが地域の人びとの暮らしに息づいているのでしょうか。その答えのひとつが、ここ坂州八幡神社の秋祭りにあります。

徳島県南部に位置する那賀町にある坂州農村舞台、ここで年に一度行われる秋祭りで地域の伝統ブンカとして人形浄瑠璃が上演されています。

これまでずっとこの地域の人形浄瑠璃を支えてきた木沢芸能振興会の吉田行雄さんにお話をうかがうと「今のようにテレビも映画もなかった時代、農村舞台で行われる人形浄瑠璃は、地域の人びとにとっての娯楽でした。人形をまわす（操る）人たちにとっても、練習の場がみんなでお酒を酌み交わす社交場。農村舞台の上にも、上演後にみんなで囲むための囲炉裏があるんです。このお祭り、人形芝居があったから、まちに住む人たちが気軽に、当たり前に、世代を超えて交流できたんです」と話します。

では、自宅でもさまざまな娯楽を楽しめるようになった現在はどうでしょうか。平成23年4月の調査によると、那賀町は人口一万人に満たないまち。「人と人のつながり」や「地域の支え合い」の希薄化が叫ばれる昨今、この年に一度のお祭りは、地域に欠かせない大切な役割を持ちます。「人形芝居は木沢の証」とも言われるほど、伝統芸能として大切に引き継がれ、お祭りという誰もが参加しやすい形で触れられるのです。かつて徳島県の各地で栄えた人形浄瑠璃。今は上演されなくなった舞台がほとんどですが、坂州農村舞台の秋祭りは、時代や社会背景が変わっても、地域の集いと交流の場としての大切な役割を持ち続けるのです。

まちの声

人形浄瑠璃芝居を地域で大切に継承していきたい。だから、振興会も息子の世代、役場の職員など、地域の30代を中心に若い人に入ってもらってます。

2006年、当時の会長が59歳の若さで他界。木沢芸能振興会はすぐに代替わりできる伝統の担い手がいなかったことが課題でした。「人形の遣い手を町外から募集するか、つぶれてしまうのか苦悶した」と話します。

自分のまちのブンカに活かす視点

自分の住むまちに残る盆踊り、神社の小さなお祭りなどのブンカをもう一度見つめてみましょう。そこには「地域の人びとが楽しみながら集う」場づくりの大切な役割があるはず。ブンカには、地域に暮らすさまざまな世代の人たちと、地域の風習について交流を育むチカラがあるのです。

NO.2

集

みんなで集まり一緒に遊ぶ！「楽しみ」で人が集まるブンカ

水口人形芝居

因幡文楽水口人形芝居保存会（鳥取県八頭町）

Minakuchi NINGYO SHIBAI

鳥取県八頭町に人形芝居が生まれたのは明治時代初期のこと。
江戸時代から全国的に流行していた賭博に代わり
健全な娯楽として普及させようと、
水口地区の青年同志が話し合って始まりました。
農閑期を利用して準備を重ね、約2年あまりで初演。
他村から招かれるようになった、という歴史を持ちます。
まだテレビも映画もゲームもなかった時代、
村の人びとに必要な「娯楽」として生まれ発展してきた人形芝居。
時を経ても変わらない、
人形芝居への「楽しい！おもしろい！」というまなざし。
そのブンカの役割を因幡文楽水口人形芝居保存会のみなさんに聞きました。

水口人形芝居とは

鳥取県八頭町の水口で受け継がれる水口人形芝居。明治時代初期に当時荒れていた村の健全化のため、人形芝居に取り組もうと考えた村の青年たちによって形成された一座で、その後、周辺農村から招かれ興行するまでになりました。現在も因幡文楽水口人形芝居保存会によって受け継がれており、平成16年には町の無形民俗文化財の指定を受けています。

☎ 八頭町教育委員会社会教育課（0858-84-1232）

人形って、そこに置いてあるだけだと"死んでいる"状態。「それが、人が手にとった途端、命を吹き込まれる。それがもう楽しくて楽しくて」。目をキラキラと輝かせてそう話すのは、因幡文楽水口人形芝居保存会の山本さん。人形について話すだけでうれしくてうれしくてたまらない様子がうかがえます。

保存会の外題（演目）には「傾城阿波鳴門」「壺坂霊験記」「絵本太功記」などがありますが、みなさんの人形を操る楽しみはそれだけにとどまりません。「伝統芸能と言うと、どうしても『古いもの』とか『守るべきもの』という視点になりがち。もちろんそれも大切だけど、続けていくために、みなさんに喜んでもらうために必要なことはなにかと考え、有名な演歌や歌謡曲、戯曲の名シーンを人形で演じて、"見やすい・わかりやすい"工夫をしています」。驚くことに水口のみなさんの手にかかれば、「傾城阿波鳴門」のお鶴ちゃんは、有名なテレビドラマの主人公に変身しますし、お弓さんは有名な演歌の世界観を美しく表現してしまうのです。何より魅力的なのが、みなさん口々にアイデアを発すること。好奇心あふれる少年・少女のまなざしそのものなのです。

「人形芝居は、知れば知るほど味が出る楽しさがあります。もともとこの周辺は団結力の強い地域。みんな持ち出しでやってきた人形芝居があったから、強く結束できたのではないでしょうか」と山本さん。「楽しい」から長く続き、「楽しい」から人が集う。人形芝居に集まるみなさんの笑顔が、地域にブンカが必要な理由を強く深く物語っていました。

まちの声

町内の小学校へ人形芝居の指導に行っています！人形芝居の面白さや魅力に気づき、自分もやってみたい！と思ってもらいたいです。

「人形芝居は知れば知るほどおもしろく奥深い」と、みんなで集まりを楽しむ保存会のみなさんですが、高齢なため、「次の担い手探しがいちばんの課題」と話します。

自分のまちのブンカに活かす視点

お年寄りの中には、古くからのお友だちや仲間としか交流していないという方や、あまり外出の機会がない、という方も少なくないでしょう。昔から地域に伝わる「遊び」や仲間で集えるものを探してみると、交流の場が広がり、生きがいを感じられるのではないでしょうか。

まちにとって大切なブンカのチカラ 2

創

人が楽しみ創造するブンカ

「まちのたからもの」とも言える地域の伝統文化を、
次の世代へつなぐため、
新しく「創造する」ことを選んだ地域があります。
地域にある異なる文化を取り入れながら続いてきた
鳥取市の円通寺人形芝居。
語りだけの浄瑠璃に、人形とお囃子を取り入れた
能勢町の人形浄瑠璃。
伝統を継承することはもちろん大事です。
でもそっくりそのまま継承するのではなく、
時代や暮らしに合わて楽しみながら、
創造することも必要です。

< P.15　円通寺人形芝居／円通寺人形芝居保存会（鳥取県鳥取市）
< P.17　能勢人形浄瑠璃／鹿角座（大阪府能勢町）

column

徳島県の人形浄瑠璃

5つの太夫部屋に20を越える人形座。人形をつくる人形師が多数活躍し、
神社の境内には人形芝居の農村舞台が日本で最も多く残る。
これらの資源を存分に活用し、古典から新作、野外公演まで
人形浄瑠璃を多彩に楽しんでいるのが徳島です。

阿波人形浄瑠璃 Tokushima

相次いで復活する農村舞台の人形浄瑠璃公演。その背景に使われた襖絵を次々と転換させて見せる襖からくり。江戸時代から続く人形座がしっかりと伝統を守る一方で、新たな人形座が結成され、人形浄瑠璃の新作が上演されるなど、徳島では、次々と新たな試みが行われています。

1

阿波木偶箱まわし Tokushima

箱の中から次々と人形を取りだし、人形浄瑠璃のさわりを演じた箱まわし。お正月には、「三番叟まわし」で1軒1軒門付けにまわり1年の福を運びました。1960年代には、ほとんど見られなくなった徳島の風景ですが、その最後の糸を「阿波木偶箱まわし保存会」がつなぎ留めました。

2

ENNTSUJI NINGYO SHIBAI

NO.1

円通寺人形芝居

円通寺人形芝居保存会（鳥取県鳥取市）

さまざまなブンカと融合
新しい試みが地域のたからものを創る

創

人形芝居の保存・継承のしかたは地域によってさまざまです。
鳥取県因幡地方に残る人形座のひとつ・円通寺人形芝居は、
さまざまなブンカとしなやかに融合しながら新しい試みに挑戦、
自分のまちのブンカを創り続けています。
江戸時代末期、鳥取城の築城や城下町整備の際に
城郭に使う石を山から切り出して運ぶ
石工たちが唄ったとされる石切歌「念力節」。
その節に合わせてダイナミックに操る、目も口も動かぬ三吉デコという人形。
地域で生まれた地域のたからものを多彩につないでいく
円通寺人形芝居保存会が見つめるブンカの「これから」のお話。

円通寺人形芝居とは

江戸時代末期に始まった人形芝居。三味線、太鼓、胡弓の演奏で念力節（お城や城下町建設のための石を切り出し運搬する重労働をした人びとが唄った労働歌）を唄い、それに合わせて人形を3人で操ります。一般的に人形芝居は「三番叟」から始まりますが、「三吉デコ」という舞から始めるのが特徴。鳥取県の無形民俗文化財に指定されています。

☎ 鳥取市教育委員会文化財課（0857-20-3367）

石工たちが唄ったと言われる石切歌に合わせて操る三吉デコ。「奴の念力、岩をも通す」の節から「念力節」と名付けられた"地域の唄"の舞台は、鳥取県鳥取市。円通寺人形芝居保存会は、この地のブンカである人形芝居の保存と継承に取り組んでいます。

「伝統芸能は、単に守り、保存するだけでは生き残っていけない。インパクトのある活動で、自分たちの取り組みが外部から注目されていると、地域の方もその価値に気づくはず」と話すのは、事務局の西村一重さん。

「戦争で一時消滅の危機に遭った人形芝居。復活させたのが私の祖父で、なくなってしまったものをもう一度生き返らせる苦労を目の当たりにしました。人形がなかったら円通寺は円通寺になりえない。これが自分たちのブンカなんだと自覚するためにはどうしたら良いかと考えながら活動しています」。

円通寺人形芝居が新しい活動のきっかけを掴んだのは平成25年のこと。「鹿野町で廃校を利用し、地域で演劇を創っている『鳥の劇場』の方が、フランスの劇作家・俳優ディディ・ガラスさんを連れて見学に来られました。これが縁となり、円通寺の人形が登場する鳥取市内の物語が創られ、上演することができました。その後のベトナム・ハノイとの交流にも『鳥の劇場』の方に架け橋になっていただきました。大切なのは、人とのつながりや出会いを活かすこと。これは文化継承において一番の肥やしです」と話す西村さん。人と関わり合いながら創造していく新しい人形芝居の可能性。その創造がさらにまたひとつ大きく地域とのつながりを広げ続けているのです。

まちの声

現在のまちの人たちに地域のことをより愛してもらえるよう、地名をテーマにコラボレーションを企画。地域愛を育むためにブンカを活用しています！

芸術とはまた違った役割や大切な意味を持つ地域のブンカ。それを受け取り保存するだけでは生き残れません。円通寺の人形を次の世代へ伝えるために、新しい試みを続けています。

自分のまちのブンカに活かす視点

担い手の減少により、規模を縮小した伝統芸能や風習はありませんか？地域の伝統を未来へ「つなぐ」ためには、時代に合わせた発展・進化が必要。もしかして現代アートなど意外なつながりの中に創造のヒントが隠れているかもしれません。新しい地域の物語をつくるのもブンカのチカラなのです。

NO.2

能勢人形浄瑠璃

鹿角座（大阪府能勢町）

200年の歴史を持つ浄瑠璃を活用し 新しい人形浄瑠璃を未来に開花させる

創

「伝統芸能」は守るべきもの。確かにそれもひとつの考え方です。
では今現在の私たちの生活様式や地域ならではの風習、
美しいと思うモノ・コトは100年後、1000年後、
どんなカタチをして、どう命を保ち続けるのでしょうか。
大阪府能勢町は太棹三味線と太夫の語りで物語が進行する
素浄瑠璃が根づく地域。
この伝統を守りながら、新しくブンカを創るため、
平成10年に生まれた人形座があります。
素浄瑠璃に囃子と人形を加え、首（かしら）から衣裳まで
なんと、すべてがオリジナル。未来のまちのブンカを創造する
能勢人形浄瑠璃「鹿角座」の取り組みとは。

鹿角座の取り組みとは

200年以上の歴史をもつ能勢の浄瑠璃は、語りと三味線による素浄瑠璃。平成10年、地域の財産として守り育てていくとともに次の世代への提案・発展のため、人形と囃子を加えたビジュアル化を図り、能勢人形浄瑠璃「鹿角座」が誕生。指導者に人形浄瑠璃文楽座の技芸員らを迎え、年間を通して行なわれるワークショップを受けながら、全国を舞台に活動しています。

☎ 浄るりシアター（072-734-3241）

大阪のてっぺんに位置する大阪府能勢町。平成26年9月13日の宵の入り、地元の子どもからお年寄り、県外や国外からいらしたであろうたくさんの人たちが、地黄城跡に集まってきました。みなさんのお目当ては今宵ここで開催される「浄瑠璃の里 能勢浄瑠璃公演」。出演するのは平成生まれの人形浄瑠璃劇団「能勢人形浄瑠璃鹿角座」です。能勢町は、人口一万一千のうち、驚くことに約200名が浄瑠璃の語りをできるという、素浄瑠璃ブンカの息づく地。およそ200年続いてきた素浄瑠璃に、「ビジュアル化」として人形を加え、鹿角座が誕生したのは平成10年のことでした。

「設立当初から劇団として独立することを目指し、地元の人たちで結成しました。太夫、三味線、人形遣い、囃子、子ども浄瑠璃、いずれもワークショップを受けながら、自主練習、依頼公演活動を行っています」と話すのは町営ホール「浄るりシアター」館長の松田正弘さん。「地域ブンカは単なる芸術ではなく"資源"。子どもたちが将来自分のまちのことを語り、地元愛を育めるよう活動しています」と続けます。鹿角座の座長を務める狭間みのりさんは「能勢は素浄瑠璃のブンカが息づくまち。この伝統が新しい創造に活きる部分も大きい。太夫が舞台で使う床本は仮名の解読も難しく、譜面としての役割もあるので、マンツーマンで耳、目、体で覚えなければいけない。これは能勢のおやじ制（P23）で人から人へ伝えられた方法」と話します。

「ブンカづくりは地域づくりそのもの」と松田さん。創造するホール、創造するまち、ブンカの200年後はまちの200年後につながっているのです。

まちの声

能勢人形浄瑠璃 鹿角座は、新しい能勢のブンカ。メンバーは「自分を高めたい」という意識が高いので、一緒に取り組むことでさまざまな垣根を越えている実感があります！

能勢の地におよそ200年も続いてきた浄瑠璃。子どもたちが将来自分のまちを語れるように、今の感性に届けるための努力が必要。

自分のまちのブンカに活かす視点

自分の住むまちの歴史をひもとくと、地域のお年寄りしか知らないような、意外な風習が残っているかもしれません。それらを活かすためには、まちのブンカをよく知り、現代の感性を取り入れて、ブンカを育てることが必要。新しいブンカを創造することがまちづくりに繋がります。

まちにとって大切なブンカのチカラ 3

結

人とまち、時代を結ぶブンカ

みんなで一つの目標に向かう時、
人と人はつながります。

「まちに残る古い舞台を復活させたい」
と一致団結した辺川農村舞台の復活公演。
「4つの派が励まし合い、競い合う」
能勢町の義太夫節おやじ制。
「住民全員をメンバーとするNPOを設立する」
智頭町の新田むらづくりの結束力。

地域に残るブンカに関わる取り組みには、
人やまち、時代を結ぶチカラがあります。

< P.21　辺川神社農村舞台／阿波人形浄瑠璃（徳島県那賀町）
< P.23　義太夫節のおやじ制／能勢の浄瑠璃 竹本四派（大阪府能勢町）
< P.25　新田むらづくり運営委員会／新田人形浄瑠璃芝居相生文楽（鳥取県智頭町）

column

鳥取県の人形浄瑠璃

江戸時代から大正時代、因幡地方では人形芝居が盛んで約30の人形座がありました。
当時この地方で流行した「念力節」に合わせて一人で遣った「三吉デコ」が
そのルーツと言われています。明治になって義太夫節の三人遣いとなり、
大型の阿波木偶が採り入れられるなど淡路や阿波とのつながりが伺えます。

円通寺人形芝居 Tottori

円通寺は「三吉デコ」が現存する全国で唯一の地域。丹後地方で行われていた大黒舞に、念力節を取り入れて発展したのが三吉デコと言われています。旧時代からの変遷をとどめる高い歴史的価値を有する人形芝居ですが、昨年は、鳥の劇場がプロデュースする演劇に参加するなど新たな試みにもチャレンジしています。

水口人形芝居 Tottori

壺坂霊験記や傾城阿波鳴門、絵本太功記などの古典作品だけでなく、「おしんの子守歌」や「壺坂情話」などの流行歌に合わせて即興で人形をまわすなど、村祭りでみんなが楽しんだ素朴な人形芝居。今も夏の納涼祭に欠かせない出し物です。鳥取市本高の人形のほか、阿波の大型木偶も使われています。

新田人形浄瑠璃芝居 相生文楽 Tottori

因幡地方の農村には江戸末期に流行した賭博を一掃するために人形芝居をはじめたという伝承が各地に残っています。新田でも明治の初めに岡山から人形を購入し人形芝居が普及します。その後、天狗久作の阿波木偶を取り寄せ、徳島や大阪の文楽からも指導者を迎えるなど、各地との交流の中で発展してきました。

HEGAWA JINJA NOSON BUTAI

NO.1

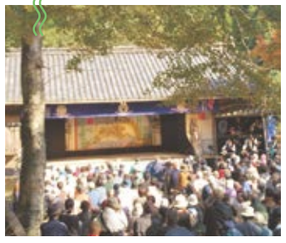
結 100年の時を超えて受け取った地域のたからものがみんなを結ぶ

辺川神社農村舞台

阿波人形浄瑠璃（徳島県那賀町）

「これは…襖からくりじゃ！！」
全国の神社に、神楽や能を奉納する神楽殿・絵馬殿があるように
徳島県内の多くの神社には、浄瑠璃を奉納するための農村舞台が残っています。
徳島県那賀町平野にある辺川神社の農村舞台で
およそ100年前の襖からくりが発見されたのは平成24年春のこと。
「この襖からくりを操作して地域の人たちに見せたい」
辺川神社農村舞台保存会と那賀町農村舞台再生協議会をはじめ
地元の人形座、高校生、まちのみんなが手を取り合い約70年ぶりに
襖からくりの復活を目指してまちの挑戦が始まりました。

※襖からくりとは
表と裏で違う絵が描かれた襖を三味線（道具返し）と拍子木に合わせ、襖をからくり技術で巧みに操り、さまざまな場面を演出する技法。
1つの場面に4〜10枚の襖を使い、襖を左右に開くと後ろに別の襖が現れる「引き分け」や「引き違い」などがあります。



辺川神社農村舞台とは

兵庫、長野、岐阜、愛知などに並ぶ農村舞台の宝庫・徳島県。全国的には歌舞伎を奉納するための舞台が多いのに対し、徳島県は人形芝居を主とする舞台がほとんどで、全国の人形芝居用の舞台の90%以上が集中。辺川神社のある徳島県那賀町には農村舞台を持つ神社も多く、近年、続々と復活。

☎ 那賀町教育委員会文化振興室（0884-62-1117）

平成26年11月23日のよく晴れた午後。名物の「はんごろし」や「かきまぜ」、晩茶を手に、たくさんの人たちがお昼ごはんを楽しんでいます。ここは徳島県那賀町にある辺川神社の農村舞台。にぎわいの中、子どもからお年寄りまで、たくさんの方が心待ちにしているのは、ここで約70年ぶりに復活する襖からくりと人形浄瑠璃の公演です。

辺川神社の農村舞台で発見された襖からくりは約100年前のもの。

「明治から大正時代に作られた襖はボロボロの状態。まずは修復の作業が大変でした。修復してもカビがつかないよう、保存や管理方法を考えるのもひと苦労でした」と、古建築等建造物調査研究会の森兼三郎さんは振り返ります。襖だけではなく、それを配置して操作するための敷居や鴨居も必要。保存会のみなさんは「辺川の襖は他の農村舞台と比べて15cmほど大きくて重い。単に襖を引くことがこんなにも難しいとは」と驚き、準備にも苦労を重ねました。

襖からくりの三味線演奏は地元の那賀高校人形浄瑠璃同好会、人形は丹生谷清流座（P35）が担当。取材時、那賀高校人形浄瑠璃同好会の部長を務めた佐竹舞さんは、ギター好きが高じて三味線をはじめた高校3年生。「人形浄瑠璃は地元の大切な伝統文化だけに、地域の方にお披露目すると思うと、プレッシャーでいっぱい」と話しながらも、本番では部員6名全員で、立派に演奏を披露しました。

辺川神社に残る襖からくりと農村舞台、人形浄瑠璃。この伝統文化がなければ結ばれることのなかった人と人のつながりは、100年の時を越えた、まちのブンカの力です。

まちの声

地域の伝統を披露するのはとってもプレッシャーだけど、すっごく夢中になれる！地元の座・丹生谷清流座の学校公演など、学生がまちのブンカに興味を持てる機会がたくさんあります。

襖からくりの披露時、三味線を担当したのは地元・那賀高校人形浄瑠璃同好会のみなさん。学生の要望から結成された同好会ですが、3年生はもう卒業。活動継続のため、新入部員の獲得が課題です。

自分のまちのブンカに活かす視点

建造物や古文書、民話など、あなたの暮らすまちに残る、いちばん古いモノ・コトは何ですか？さまざまな歴史や伝統文化を発見したら、その素晴らしさをまちに広げて共感をよぶにはどうすれば良いか、楽しく考えてみましょう。さまざまな視点の人たちと出会い、まちに絆がうまれるはず。

NO.2

結

地域の人の手から手へ
おやじ制が広げる能勢の浄瑠璃ブンカ

義太夫節のおやじ制

能勢の浄瑠璃 竹本四派（大阪府能勢町）

GIDAYUBUSHI
OYAJISEI

なぜ200年前に地域に生まれた伝統文化が今も残るのでしょうか。
ひとことで言えば「地域に必要だったから」。
では、なぜ必要とされたのか、
必要性だけで生き続けることができるのか。
大阪府能勢町で江戸時代から続くのは
地域ブンカ・浄瑠璃に携わる人口を広げながら継承する
「おやじ制」というシステム。
「家元」に似ていながら、世襲制でもなく、経済的利点を伴わない。
地域の人から人へ、体温のある継承と後継者育成が自然に行われた
理由と希少な伝承のあり方についてお話をうかがいに
「大阪のてっぺん」を訪ねました。

能勢の浄瑠璃 竹本四派（おやじ制）とは

能勢に江戸時代から伝わる浄瑠璃は、太棹三味線と太夫の語りによって物語が進行する「素浄瑠璃」と言われる地域ブンカ。世襲制ではないおやじ制度によりできた竹本文太夫派、竹本井筒太夫派、竹本中美太夫派があり、互いに励まし競い合ってその伝統を継承。平成13年には新しく竹本東寿太夫派が誕生し、4つの派になりました。国の選択無形民俗文化財。

☎ 浄るりシアター（072-734-3241）

三味線（太棹）と太夫の語りだけで物語を進行させる素浄瑠璃。江戸時代、大阪へ医者修行に出かけた能勢の村人が浄瑠璃を習い、帰郷して広めたのが起こりと言われています。能勢の浄瑠璃は「おやじ制」と言われる特徴的な伝承方法でまちに息づいています。

「家元制度に似ていますが、世襲制ではありません。太夫はおやじになる前に弟子をとり、後継者を育成します」と話すのは、43代目の竹本井筒太夫・畠中敏行さん。「竹本文太夫派、竹本井筒太夫派、竹本中美太夫派に加え、平成13年に竹本東寿太夫派ができ、現在、能勢には4つの派があります。任期はだいたい3年ぐらいで、おやじでいる間、弟子たちの着物からお披露目の宴会の費用などを持ち出さなくてはいけませんが、期間限定で新しいおやじが誕生するので、それまで縁がなかった地域の人たちを浄瑠璃の世界へと誘いこむことができるんです」。能勢の浄瑠璃が広がり、今も脈々と生き続けるのは、このシステムそのものが能勢に根ざしていたからかもしれません。

三味線や道具職人で結成された「伝統文化の黒衣隊」の谷尾剛さんもおやじに弟子入りした経験を持つひとり。

「能勢には伝統文化を受け継ぐことへのステイタスがあった。他の派の浄瑠璃を観て参考にするなど、いいライバル関係を築けた。その切磋琢磨があったから、今も消滅することなく続いているんだと思います」。

「アイツは浄瑠璃語れるスゴいヤツや」などの会話にも見られるように、能勢の浄瑠璃は暮らしの一部になっています。

まちの声

おやじを務めるのはおよそ3年。その間は負担も大きいですが、他の派よりも上手になりたい！というライバル関係や、浄瑠璃に関わることがステイタスだと感じる風土があります。

約200年もの 長い間、大阪のてっぺん能勢で受け継がれてきた浄瑠璃は、義太夫節のおやじ制があったから。4つの派がいいライバル関係を築けたからこそ、切磋琢磨して継承されました。

自分のまちのブンカに活かす視点

まちのブンカの中には、地区ごとにお神輿を持つお祭りや、学校ごとに競争して発展したスポーツのブンカなど、担い手がいくつかのチームに分かれているものがありませんか？良いライバル関係があるから切磋琢磨できる、ブンカが継承される、そんな視点を持って見つめてみましょう。

NO.3

新田むらづくり運営委員会

新田人形浄瑠璃芝居相生文楽（鳥取県智頭町）

人形を操る「3人1組」の精神が結んだ むらづくりのための団結・結束力

結

全国に残る「新田」の地名が表すもの。
それは、この地が生まれた当時、新しく開拓され、
村の人の手でつくられた場所ということ。
鳥取県南部、岡山県の県境にある集落「新田」もそんな場所のひとつです。
むらづくりの団結力や結束力を高めたのは、
1体の人形を3人で操る「3人1組」の精神。
集落の高齢化が進む21世紀のいま、
地域の消滅を危惧したむらの人たちが立ち上がり、
日本で初めて、なんと住民全員をメンバーとする NPO法人を設立。
むらづくりのために新田が選んだ道、それもまた
むらづくりの精神を育んだ、美しい山里に残る伝統ブンカの継承でした。

新田人形浄瑠璃芝居相生文楽とは

新田人形浄瑠璃芝居相生文楽は、明治時代初期に村の青年たちが立ち上がり健全なまちづくりのために、人形を揃え、岡山県の人形座などから指導されたのが始まりと言われています。昭和20年代に人間国宝である桐竹紋十郎に指導を受け「相生文楽」の幟を贈られ、今に至ります。保有する人形首は鳥取県智頭町の有形民俗文化財に指定されています。

☎ 清流の里新田 人形浄瑠璃の館（0858-75-1994）

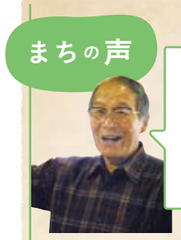
人形浄瑠璃は、「首と足、左手の3人でまわすでしょう。この3人1組の精神こそ、新田のむらづくりに活かされた団結力の根源だと思いますよ」。目をキラキラと輝かせながら、新田のむらの歴史についてお話くださるのは、新田むらづくり運営委員会の岡田さん。平成3年から始まった活動で人形浄瑠璃や山里での収穫体験などの都市交流、ブンカ交流を進めてきたメンバーのひとりです。驚くことに3人1組の精神のおかげで「むらにケンカが起こらなかったんです。険悪な雰囲気になると、翌日一緒に人形をうまくまわせないでしょう。人形浄瑠璃が私たちのこころにくれた効果は大きい」と笑顔で続けます。

明治6年に神社に奉納した記録が残る新田の人形浄瑠璃。精神的混乱が起こったと言われる明治初期に「人形浄瑠璃が生まれていたということは、人形浄瑠璃がむらの精神的なよりどころになっていたのでしょう。開拓された集落にさまざまな人が集まり住み着いた。放っておけばバラバラになるはずのむらに人形浄瑠璃があったから団結して生きていくことができたんです」。まちのブンカによって集い、結束を強め、生きてきたむらの物語は、全国で初めて集落全体をNPO法人化という新しいページをつづることに。

その後、新田地区に「清流の里新田 人形浄瑠璃の館」が完成したのは平成12年のこと。

「集落の高齢化が進み、このままではいけない、と立ち上がった。目指すのは、このむらの精神を育ててくれた人形浄瑠璃の発展です」と岡田さん。新田地区のまちのブンカには、地域の誕生とこれからを結ぶ大切な役割があるのです。

まちの声



地域のブンカの次の担い手を探しながら、むらの魅力を広く伝えるため、人形浄瑠璃だけでなく、山村体験などの地域のブンカ全体に対する活動を精力的に進めています！

岡山県との県境に位置する鳥取県智頭町。自然豊かな山村にある清流の里新田 人形浄瑠璃の館は、人形浄瑠璃の鑑賞・体験ができ、隣接する施設では宿泊も。館は地域で運営しています。

自分のまちのブンカに活かす視点

自分の住む地域の人との関係を築き、人と人のこころを結ぶのもブンカのチカラ。自分のまちがどういう場所でどんな課題を抱えているか、また、どんな地域にしたらいいかをコミュニティの一員として考えてみましょう。みんなで考え、一致団結するのにまちのブンカはひと役かってくれるはず！

まちにとって大切なブンカのチカラ 4

育

人のこころを豊かに育むブンカ

地域に残る古くからの言い伝え
それは史実？それとも伝説？
それがどちらであったとしても、
地域の歴史を学ぶことができるはず。
まちに残る伝説に基づくオリジナルの芝居を
継承する和知人形浄瑠璃。
プロの人形座が活躍し、全国に人形浄瑠璃を
広めた歴史を持つ淡路人形浄瑠璃。
人のこころを育むブンカは、
まちの生きた教材です。

< P.29　和知人形浄瑠璃／和知人形浄瑠璃会（京都府京丹波町）
< P.31　淡路人形浄瑠璃／淡路人形座（兵庫県南あわじ市）

column

大阪府の人形浄瑠璃

竹本義太夫や近松門左衛門の活躍で隆盛を極めた人形浄瑠璃。
他に類を見ない人形浄瑠璃が伝わるのが“大阪のてっぺん”能勢町です。

能勢人形浄瑠璃
鹿角座 Osaka

江戸時代から200年以上にわたり受け継がれてきた素浄瑠璃に、平成10年に地元の人びとによる人形とお囃子が加わって生まれたのが能勢人形浄瑠璃です。「浄るりシアター」を根城に、地域に深く根を下ろした伝統と、どこにもない新しいものを創造しようとするバイタリティーが融合したのが鹿角座です。

能勢の浄瑠璃
竹本四派 Osaka

人口1万人余りの町で200人を越える太夫を擁する能勢の浄瑠璃を支えてきたのは「おやじ」とよばれる独自の制度です。それまで浄瑠璃に関心のなかった人びとを積極的に勧誘し新たな弟子を養成するのが「おやじ」の任務です。平成13年に新たな一派が生まれ4派となるなど、全国的にも希少な伝承のあり方は今も健在です。

WACHI NINGYO JORURI

和知人形浄瑠璃

（京都府京丹波町）

No.1

伝統が育む子どものこころ 歴史を学び、地域を愛する 育

人形遣い、太夫、三味線、舞台演出にストーリーそのもの、
何度観ても新しい楽しさを発見できる人形浄瑠璃。
子どもには難しすぎる？いいえ、そんなことはありません。
地域に伝わる民話や、むらに根づく人形浄瑠璃ブンカには
子どもの豊かなこころと地域への愛を育むチカラがあるのですから。
時は江戸末期、京都府は京丹波町大迫のむらで楽しまれた
素朴な張りぼて人形に端を発する和知人形浄瑠璃のように。
京丹波で多くの人びとが集まる道の駅「和」に併設された
伝統芸能常設館で定期公演を行う和知人形浄瑠璃会
会長の大田喜好さんに地域ブンカの大切な役割について
お話をうかがいました。

和知人形浄瑠璃とは

江戸時代末期、大迫村（京丹波町大迫）で農閑期に素朴な人形を操って楽しんだことが起源とされる和知人形浄瑠璃。和知文楽として発展する中、昭和60年に京都府無形民俗文化財に指定。和知人形浄瑠璃会として、道の駅「和」伝統芸能常設館にて定期公演を行うなど、活発に活動しています。代表作には地元の民話をもとにした「長老越節義之誉」など。

☎ 京丹波町教育委員会（0771-84-0028）

自分の生まれた場所あるいは今暮らしている場所は、どんなところですか？どのような気候で何が生産され、人びとはどう暮らしていますか。地域の歴史や物語をご存知ですか。

京都府のほぼ中央部、京丹波町。ここで生まれた和知人形浄瑠璃は、まちの歴史とともにたくさんの人たちの手で育まれた地域のブンカ。「京丹波町には和知人形浄瑠璃のほかに和知太鼓、小畑万歳、文七踊りの4つの伝統芸能があります。そのうち、和知人形浄瑠璃の保存・発展を目指し設立されたのが、和知人形浄瑠璃会です」と話すのは、和知人形浄瑠璃会会長の大田喜好さんです。「和知人形浄瑠璃は『一人遣い』という人形操作法が特徴。代表する演目『長老越節義之誉』は、地元の民話がもとになった作品です」。「長老越節義之誉」は、江戸時代寛文のころ、園部藩を舞台に繰り広げられる、とある夫婦の物語。

「この物語は中学校の『総合的な学習の時間』に選択科目（人形浄瑠璃）として採り入れられています。また、小学校高学年の人形クラブでは『傾城阿波鳴門』を扱い、語りと人形遣いを教えています」と大田さん。この地域に赴任してきた中学校の校長先生が「こんな伝統文化が残っているなんて素晴らしい！」と依頼されたのがきっかけでした。現在、和知人形浄瑠璃会には3名の高校生メンバーが志願して所属しています。地域のブンカにこころをふるわせる京丹波町の子どもたち。ブンカを"地域のたからもの"と認識し、素直に感動できるこころ。和知人形浄瑠璃が育む豊かさに地域ブンカの大切な役割のひとつを見つけました。

まちの声

中学校の授業でも「長老越節義之誉」を扱っており、物語からまちのブンカの魅力を伝えています。興味の間口を広くすることに役立っていると思います。

和知の民話をもとにした作品「長老越節義之誉」は、平成の世に新しく生まれた、和知人形浄瑠璃を代表する作品。人形浄瑠璃を通して子どもたちにまちのブンカにたくさんふれてもらおうと、和知人形浄瑠璃会が活動しています。

自分のまちのブンカに活かす視点

自分の暮らすまちに伝わる民話や伝説を知っていますか？古くから語り継がれる物語には、現在のまちの暮らしにつながる足跡や、その源流を知るヒントがいっぱい。民話や伝説を地域のブンカに活用する方法を探ってみると、意外なところから新しいブンカの担い手を発見できることでしょう。

NO.2

育

地域力で育て続ける プロ集団の人形浄瑠璃

日本全国に残る伝統芸能・人形浄瑠璃は
淡路の人びとの活躍ぬきには語れません。
500年の歴史を持つ淡路人形浄瑠璃の特徴は、
人形浄瑠璃がひとつの「職」として生きているということ。
生業だからこそ、妥協することなく磨いた技術、
生業だからこそ、長い時間をかけて育まれた地域のチカラ。
地域の人びとの人形浄瑠璃への思いと団結力、
ブンカが私たちにくれる産物のひとつと言えるでしょう。

淡路人形浄瑠璃

淡路人形座（兵庫県南あわじ市）

AWAJI NINGYO JORURI

淡路人形浄瑠璃とは

室町時代末期に西宮（兵庫県）の人形遣いから伝わったのが起こりとされ、18世紀前期には40以上の人形座が全国を巡業し、浄瑠璃文化を伝えました。各地で伝承される人形芝居の多くは淡路系人形芝居です。中央では早くに廃絶した演目など淡路独特の演目や、早替わりなどの演出を伝えてきたことも特色です。淡路人形座はその伝統を受け継ぐただ一つの人形座。福良港にある専用劇場での定時公演や出張公演のほか、人形浄瑠璃の振興のための活動をしています。国指定重要無形民俗文化財。

☎ 淡路人形座（0799-52-0260）

「人」形浄瑠璃は400年ほど前、京都で生まれましたが、淡路の三條村（南あわじ市市三條）にはそれ以前から、人形操りの長い伝統がありました。江戸時代になると、最新の浄瑠璃を取り入れ、各地へ巡業に出ました。淡路の人形座はもともとプロの芸能集団でした」。と話すのは、淡路人形浄瑠璃資料館の中西英夫館長。淡路人形浄瑠璃が職業であったからこそ、演目も技術も飛躍的に発展していったのです。

淡路人形浄瑠璃に魅せられ、長年、中学校で人形浄瑠璃クラブを指導し、淡路人形座応援団を結成した田端幸子さんは「だからこそ、地域の理解も大きい。地域に伝わる『だんじり唄』のように古くからあるものを大切にしようという素地があります。このコミュニティのチカラこそ、淡路人形浄瑠璃がこれからも生き続ける原動力」と続けます。

一方、淡路は浄瑠璃を語ったり、人形を操ったり、三味線を弾ける子どもが多いことも特徴のひとつ。小中高校のクラブ活動や地域の子ども会、社会人グループでも人形浄瑠璃に取り組み、文化庁長官賞を受賞したり、海外公演を行うなど、そのレベルの高さでも知られています。また、人形の制作技術を伝承しようと、三つの市民サークルが木偶づくりに励んでいます。

淡路人形座の支配人・坂東千秋さんは「3人で人形を遣う人形浄瑠璃は、世界一の技術。地元の子どもに「スゴイ」と言わせたいし、世界中どこへいっても誇れる芝居だと思っています。」自分たちのまちのブンカに妥協はありません。人形浄瑠璃のふるさとの取り組みそのものが世界に誇れるブンカなのです。

まちの声

ブンカを支えるのは地域の人のチカラ！地域をあげて取り組んだ養成プロジェクトが効果をあげています。小学校高学年ぐらいから人形浄瑠璃を始める子もいます。

江戸中期には40ほどの人形座があった淡路ですが、娯楽の多様化により、その数も減少、現在は淡路人形座1座のみ。若い活動の担い手を育成するという課題に対し、さまざまな取り組みを行っています。

自分のまちのブンカに活かす視点

あなたの暮らすまちに古くから続いている産業に結びついた文化はありませんか？そんな地域のくらしに根づく文化にも、次の世代へとつなぐ担い手の発掘は欠かせません。まちのブンカがどのように子どもたちに伝わっているか、カッコいい！という憧れや夢づくりに役立っているか、目をむけてみましょう。

まちのチカラ × ブンカのチカラ

Talk about Power of BUNKA!

『まちのブンカ』を創る人たち

「伝統芸能をやる」んじゃないんです
地域に残っていた「人形浄瑠璃をやる」
の意識だと人がどんどん集まってくる

丹生谷清流座　湯浅 悦司 さん

カッコいいな！オモロいな！が大事
ブンカづくりはまちづくりそのもの！

浄るりシアター館長　松田 正弘 さん

ブンカがなければ地域力は生まれない
地域力がなければブンカは育たない

南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館館長　中西 英夫 さん

column

京都府の人形浄瑠璃

浄瑠璃人形の操作方法は、主遣い、左手遣い、足遣いの三人でひとつの人形を遣う
三人遣いが基本ですが、一人遣いや糸操り、ロクロ車に腰掛けて遣う車人形など
さまざまな形態が現存しており、日本の人形文化の奥行きを感じます。
京都には、特殊な一人遣いの人形操作を伝承している地域が2カ所もあります。

和知人形浄瑠璃 Kyoto

傾城阿波鳴門や絵本太功記などのほか、地元の江戸時代の民話を基にした「長老越節義之誉」や和知太鼓の由来とされる物語の「夏艸丹ノ国噺」などオリジナルの演目もあります。効率よく人形を遣うために工夫された、一人遣いの操作方法は、動きに制約はあるものの和知人形浄瑠璃の大きな特徴です。

佐伯灯籠人形浄瑠璃 Kyoto

佐伯灯籠は亀岡市の薭田野町・吉川町に鎮座する四つの神社の合同祭です。祭礼行列に加わる台灯籠と呼ばれる移動式の舞台で、義太夫節に合わせて演じられる人形浄瑠璃です。約35cmの小さな人形を、背中や両手に取り付けた竹串などで操作します。人形の遣い手は基本的には一人一体ですが、登場人物の多い時は、一人で何体もの人形を遣うこともあります。

まち のチカラ
ブンカ のチカラ

「伝統芸能をやる」んじゃないんです 地域に残っていた「人形浄瑠璃をやる」の意識だと人がどんどん集まってくる

丹生谷清流座　湯浅 悦司 さん

「丹生谷清流座」のメンバーで、徳島県那賀町職員。徳島に伝わる阿波人形浄瑠璃の郷土文化伝承と地域への貢献を目的に「丹生谷清流座」を設立。町の職員として業務に当たる一方、清流座の一員として各地での公演にも精力的に取り組んでいます。

徳島県那賀町。この自然豊かな美しいまちに「丹生谷清流座」が生まれたのは平成21年のこと。「結成前の平成19年、人形遣いの勘緑さん(※)が徳島にいらっしゃって、同じ那賀町にある北川の農村舞台で公演をしたんです」と話すのは、丹生谷清流座の湯浅悦司さん。「那賀町は人形浄瑠璃を奉納するための農村舞台が多数残っている地域。公演後、青年団で人形座を結成できないかと相談されたのがきっかけですね」。

勘緑さんの指導により、どんどん人形浄瑠璃の魅力にはまり込んでいった湯浅さん。丹生谷清流座の活動には青年団OBの一員としての考えもお持ちです。「もともと地域の伝統芸能や人形浄瑠璃に興味を持っていた訳じゃないんですけど(笑)。青年団で何かやろう、ということになった結成前、地域の方々に色々聞いてみようと。その時に『ばぁが小さい時は人形浄瑠璃があったのに、なくなって寂しい』という意見をあちこちで耳にしたんです。文化と言えば子育てや教育に役立てるイメージがありましたが、だんだん人形浄瑠璃をやることが自分たちを育ててくれた地域への恩返しになるんじゃないか、という意識になってきたんです。伝統芸能じゃなくて、地域に残っていた人形浄瑠璃をやる、そのことがたくさんの意味を持つように思えましたね」。

そして、自身の活動についてこう続けます。『こんなに自分のまちを好きな人、初めて見た』とか言われます(笑)。文化ってそもそも地域のもので人形浄瑠璃はひとつのデバイス。人形浄瑠璃をやるとどんどん人が集まってくるんです。『伝統芸能を継承する』ではなく地域に残っていた『人形浄瑠璃をやる』、その活動そのものが地域のつながりを生むんだと思います」。

※勘緑…浄瑠璃人形遣い。人形浄瑠璃の普及・発展と文楽人形の新しい可能性を求めて、平成24年1月、33年間在籍した文楽座を辞しフリーの人形遣いに。主宰する「木偶舎」での公演活動のほか、全国各地の人形芝居の指導・演出や、徳島県の農村舞台復活にも積極的に取り組んでいる。平成20年4月から人形浄瑠璃とくしま座芸術監督。平成21年徳島新聞文化賞受賞。

丹生谷清流座

那賀町内の青年団が中心となり平成21年6月28日人形浄瑠璃座を結成。現在11人の座員により活動しています。座名の由来は、町内に源流を持ち大海に流出る清流那賀川の清流に、青年団の「青」のイメージを重ね、那賀町の古くからの俗称である「丹生谷」を合わせたものです。ふるさとを思う気持ちを高齢者から子どもまでが共有できる、慣れ親しんだ呼び名として名付けられました。

まちのチカラ × ブンカのチカラ

カッコいいな！オモロいな！が大事 ブンカづくりはまちづくりそのもの！

浄るりシアター館長 松田正弘さん

能勢の町営ホール「浄るりシアター」館長で、能勢人形浄瑠璃 鹿角座のプロデューサー。約200年の素浄瑠璃の伝統が残る能勢町で、囃子と人形を加えた人形浄瑠璃を創造するに当たり、伝統と創造を共に目指す道を見つけた、鹿角座設立の立役者。能勢と地域ブンカの独自性にこだわりを持つ。

まちづくりに文化を活かせるかという、実に率直な疑問にお答えいただこうと向かったのは大阪府能勢町。約200年の素浄瑠璃（太棹三味線と太夫の語りによって物語が進行する）の伝統が受け継がれる地。ここに立つ町営ホール・浄るりシアターに館長の松田正弘さんを訪ねました。

「文化がまちづくりに活かせるかどうかは、プロデュースの仕方によると思います。いくら能勢に長く続いた浄瑠璃があるといっても、『カッコいいな！オモロいな！』と感動してもらえるいい舞台をつくらないと、注目されないですから」。町営のパブリックホールが「浄るりシアター」と名付けられたのは、もちろん浄瑠璃が能勢を息づいていたことと、「浄瑠璃を活かしたまちづくりへの決意の表れ」と松田さん。では、どのようにプロデュースするか。地域の人を含め、みんなに憧れを抱いてもらえるか、それをカタチにするのが能勢人形浄瑠璃 鹿角座（※）の目指すところです」。

素浄瑠璃の根付く地に人形と囃子を加え、新しく生まれた能勢人形浄瑠璃 鹿角座は、浄るりシアターが「創造するホール」であることの象徴と言えます。

「私たちがまなざしをむけるのは200年後の能勢町。200年前に生まれた浄瑠璃が今も残っているのはスゴいことですが、でも文化は、その時その場所で暮らす人たちが必要性を感じなかったら、なくなってしまうこともあります。では、200年後の能勢町に私たちが何を残せるか。はるか昔に生まれた素浄瑠璃伝統を人形浄瑠璃として、『まちのブンカ』として創造した時代があったんだよ、だから能勢はこんな素晴らしいのだと話してもらえるような、未来のまちへのメッセージですね。まちに残る文化資源を、今の『まちのブンカ』として創ることが、私たちにできるまちづくりだと思っています。

※能勢人形浄瑠璃 鹿角座…200年以上の歴史をもつ能勢の浄瑠璃は、語りと三味線による素浄瑠璃。平成10年、地域の財産として守り育てていくとともに次の世代へ提案・発展のため、人形と囃子を加えたビジュアル化を図り、能勢人形浄瑠璃「鹿角座」が誕生。指導者に人形浄瑠璃文楽座の技芸員らを迎え、年間を通して行なわれるワークショップを受けながら、全国を舞台に活動しています。

浄るりシアター

全席505席、人形浄瑠璃をはじめコンサートや講演会など多目的に利用されている大阪府能勢町の町民ホール。ロビーを開放しており、浄瑠璃の映像や資料展示のほか、能勢人形浄瑠璃 鹿角座（P17）の拠点として、実際に使用された人形なども展示。能勢の地に約200年続く素浄瑠璃の伝統と、新しく創造する人形浄瑠璃ブンカを発信、全国的な注目を浴びています。

大阪府豊能郡能勢町宿野30
☎ 072-734-3241

まちのチカラ
ブンカのチカラ

ブンカがなければ地域力は生まれない
地域力がなければブンカは育たない

南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館館長 中西 英夫さん

市村六之丞座の人形・道具を保存展示する南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館の館長。市村六之丞座は、淡路人形の元祖・上村源之丞座につぐ名門の一座で、昭和40年代まで活動を続けました。

南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館
兵庫県南あわじ市市三條880
0799-43-5037
月曜日、祝日の翌日、年末年始

淡路人形の起こりは室町時代後期。兵庫県西宮神社に仕えていた百太夫(ひゃくだゆう)という傀儡師(くぐつし)が淡路の三條村を訪れ、人形操りを教えたのが始まりと伝えられています」。淡路人形浄瑠璃の歴史を教えてくださるのは、南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館の中西英夫館長。「淡路人形浄瑠璃の大きな魅力の一つとして、他にない独自の演目や演出があげられます。『奥州秀衡有髻塚(おうしゅうひでひらうはつのはなむこ)』は1739年の初演以来、大阪では一度も上演されていない忘れられた外題(演目)ですが、淡路では戦後まで伝承しました。『賤ケ岳七本槍』は淡路座が2外題を取り合わせて改作した、騎馬武者8騎(人形遣いは32人)が勢揃いする大掛かりな演目です。また神事色を色濃く残しながら、一方では「早替わり」や「道具返し(襖からくり)」などケレン味(観客を驚かせる趣向)に富む演出を伝承してきたことも特色で、これらの独自性が淡路人形浄瑠璃の魅力です。このような高いエンターテインメント性は"職業"であったからこそ生まれたのです」と中西さんは続けます。

淡路人形浄瑠璃と地域の関係は?「三人遣いの人形芝居は経営的に不利で、職業だったからこそ幾度となく存続の危機に直面しました。江戸時代、徳島藩は興行の便宜を図ったり、ときには資金も貸し出しました。『元木家記録』を見ると、阿波の豪農・豪商が請元となって淡路座の興行を打ちましたが、多くは赤字になっている。損をかぶってでも地域に芸能文化を提供する彼らの心意気を感じます。現在、淡路人形協会が中心となり、市の補助金、サポートクラブ、ふるさと納税など幅広い支援をいただいています。伝統文化の存続にかかせないのは、地域の団結力だと思いますね。

『奥州秀衡有髻塚』鞍馬山の段

『賤ケ嶽七本槍』山の段

『玉藻前曦袂』神泉苑の段

淡路人形座

吉田傳次郎座を継承し、昭和39年に三原町市(南あわじ市市)で発足しました。その後、福良港(阿淡汽船待合所の2階)、大鳴門橋記念館内の淡路人形浄瑠璃館に移転し、平成24年、福良港に念願の専用劇場「淡路人形座」がオープンしました。

兵庫県南あわじ市福良甲1528-1地先
0799-52-0260
10:00 11:00 13:00 14:00 15:00
水曜日、年末、臨時休館日

column

関西ブンカのいま

関西では、人形浄瑠璃をはじめ、地域で生まれ、
まちの発展とともに成長してきたさまざまな文化があります。
和歌山県の地芝居と滋賀県の冨田人形をご紹介します。

二川歌舞伎芝居 和歌山県

地域の文化を子どもたちの手に 和歌山県下でも珍しい農村歌舞伎

NO.1 PICK UP

和歌山県有田川町二川にある城山神社。この地に祭礼行事として息づく二川歌舞伎芝居があります。二川歌舞伎芝居は、農耕に従事した人びとが五穀豊穣を願う祈祷舞踊が起源。江戸時代の文化・文政の頃には、京都や大阪から本歌舞伎の振付師を雇い入れて、本格的な農村歌舞伎へと成長してきました。

現存する演目は県指定無形民俗文化財の「寿式三番叟」。姫、おす鶴、めす鶴、面箱持ちの4人の役者によって演じられ、神事として奉納されます。

昭和に入り、戦争などで存続が危ぶまれましたが、昭和44年には保存会の手により復活。さらに、地元・城山西小学校では、毎年秋に「寿式三番叟」を演じる「二川こども歌舞伎」が今も続けられており、地域の子どもたちの豊かなこころと、地域愛を育む活動として、長く根付いています。

城山神社

和歌山県下では数少ないまわり舞台（和歌山県指定有形文化財）があり、二川歌舞伎芝居の舞台として知られています。毎年10月の秋祭りで「寿式三番叟」が奉納されています。

二川歌舞伎芝居保存会

☎ 0737-23-0611

冨田人形 滋賀県

江戸時代から続く伝統で国際交流 多彩なコラボレーションで進化

NO.2 PICK UP

冨田人形が発足したのは天保6年のこと。阿波の人形座が訪れた際、大雪に見舞われ興行できず、旅費代わりに置いていった人形で、村の芝居好きが稽古をはじめたことに端を発します。

冨田人形を受け継いだのは、ほとんどが専業農家のメンバー。日本の就労形態の変化に伴い、専業農家も減少、活動も下火に。そんな折、地元の若者たちで地域の文化を守ろうと結成されたのが冨田人形共遊団でした。

特筆すべきは、海外からの留学生を受け入れた国際交流。さらに、セリフをオペラ調に置き換えて、オーケストラで演じたり、詩吟に合わせて演じるなど、多彩なコラボレーションに積極的に取り組んでいます。これまでの伝統の枠に捉われず、自由な発想で創造し続けるブンカの形がここにあります。

冨田人形共遊団（冨田人形会館）

滋賀県選択無形民俗文化財の冨田人形の保存と発展を目指し設立。平成3年にオープンした冨田人形会館には専用の舞台があり、年2回の定期公演が行われています。

☎ 0749-72-2082

まちづくりに取り組む人、文化活動に携わる人、
それぞれを対象に「まちのブンカ」のこれからを考えました

symposium

まちのブンカ会議 シンポジウム

地域の文化活動に取り組む方や、文化振興に携わる行政職員などを対象にしたシンポジウム。文化活動、まちづくり、それぞれの専門家を招き、文化に携わることは地域づくりにつながっていること、そのためにどんな取り組みが必要かを論点に、「まちのブンカ」のこれからについて考えました。

＞P49〜54

workshop

まちのブンカ会議

人形浄瑠璃の関係者だけに限らず、まちづくりや地域活性化に興味を持つ方を対象に開催したワークショップ。地域にブンカがなぜ必要なのか、今後ブンカをどう活かしたら、まちの魅力につながるのかをワークショップ形式で楽しく意見を出し合いました。

＞P45〜48

みんなで考える

まちのブンカ会議

まちづくりに取り組む人たちにはブンカの可能性を、文化活動に携わる人たちにはまちづくりに活かすヒントを。人と地域をつなぐ共通語とも言える『まちのブンカ』をテーマに、ワークショップとシンポジウムを開催し、双方向からアプローチする「まちのブンカ会議」を開催しました。人が地域で生きて行く上でよりどころとなるブンカ、地域に欠かせないブンカの"これから"について、みんなで楽しく考えました。

まちのブンカ会議 ワークショップ形式で考えるまちとブンカ

コミュニティにおけるまちのブンカの大切さを見直したり、地域ブンカのこれからをワークショップ形式で楽しく意見を出し合う「まちのブンカ会議」。大阪、徳島の両会場で関西各地で活動する人形座による人形浄瑠璃を上演。活動に携わる方たちによる、人形浄瑠璃の魅力や各地の現状と課題などのトークセッションと、まちのブンカのこれからについて意見交換するワークショップを開催しました。当日お集まりいただいたのは、人形浄瑠璃に限らず「地域のブンカについて考える」ことに興味を持ってお集りいただいた方々。自分のまちのブンカについて、さまざまなお立場からのご意見をいただきました。

会場

2014年12月13日(土)
〈 大阪会場 〉
あべのハルカス近鉄本店「SPACE9」

2014年12月20日(土)
〈 徳島会場 〉
徳島県立阿波十郎兵衛屋敷

プログラム

- はじまりのごあいさつ
- 人形浄瑠璃公演
- トークセッション
  テーマ「人形浄瑠璃の魅力、現状と課題」
- アイデア出しのワークショップ
- 話し合いの結果を発表・共有
- おわりに

出演団体・トークセッション出演者

〈 大阪会場 〉
太夫:宮崎照美 三味線:鶴澤友丸
人形座:寄井座　徳島県神山町の中心地である神領地区で、嘉永元年(1848年)に設立された人形座。当時、全国を巡業した淡路の人形座の中でも有名な上村源之丞座に所属していた市川氏の指導を受けたことから、座名は上村都太夫座であった。所有する木偶人形は60体余りあり、そのほとんどが「天狗久」の作で、県の有形文化財に指定されているものも多い。人形座:丹生谷清流座(P35)

〈 徳島会場 〉
太夫・三味線:喜笑会
人形座:あわ工芸座　昭和57年に伝承座として設立、その後平成5年に現在の「あわ工芸座」に改称した。阿波人形浄瑠璃振興会の運営委員を務め、使用する木偶人形も自ら制作していた前座長・後藤文子さんが平成26年3月に突然他界。座の存続にむけて、座員が一丸となり、義理の娘にあたる後藤俊子さんを新座長に活動を継続している。過去12回の海外公演の実績を持つ。

トークセッション出演者
〈大阪会場〉
- 寄井座 座長:山尾納さん
- 丹生谷清流座:湯浅悦司さん
- NPO法人阿波農村舞台の会:佐藤憲治さん

〈徳島会場〉
- あわ工芸座 座長:後藤俊子さん
- 勝浦座:松下義和さん
- 南あわじ市淡路人形浄瑠璃資料館
  館長:中西英夫さん
- NPO法人阿波農村舞台の会:佐藤憲治さん

まちづくりにブンカを活かすヒント

（トークセッション&ワークショップ）

work 1 「あなたにとってブンカとは？」抜粋

- 季節の風物詩
  今年もこの季節が来たと感じられる
- 感じるためのこころを育むもの
- つながりを生むもの
- 伝承するもの
- 地域の中心となるもの
- 集まりをつくるもの
- 時間を超える普遍的なもの
- 教育に活用できるもの
- 住んでいる人の誇りになるもの
- 地域の個性をつくるもの
- 地域に住む人たちをつなぐもの
- 地域のお楽しみ

work 2 「まちにブンカを活かすアイデア」抜粋

- 新しいジョールリ プロレス 人形浄瑠璃
- ジョールリ居酒屋をNYに出してみる！
- 人形を講師に食と酒のスクールを開講
- まちづくりの活動にブンカを組み入れる！
- まずは「知る」こと！SNSや動画共有サイトでの情報発信
- お年寄りと若者をブンカでつなげるイベント
- デザイナーとコラボしたジョールリグッズの開発
- ブンカをテーマにした地域のミライの絵を描く
- 徳島に行きたい！ブンカと食を体感できるツアー
- 伝承活動を刺激する全国人形芝居フェス
- 学校や祭りなど、人形浄瑠璃の地域への露出を増やす
- ご当地グルメなども含むブンカをテーマに地域対抗ブンカ合戦

参加者の声

丹生谷清流座のみなさんの行動力に圧倒されました。ブンカとは、その良さを残しつつ語り継いでいくべきもの。人に確認されて初めて価値を持つのだなぁと感じました。伝統工芸の発信活動に役立つモチベーションにつながりました。

ブンカ活動を行う人とブンカ事業に関わる人、みなさまの意識が高く、とても意義深いイベントでした。特にワークショップでは、自分が主体的に行動すること、私にもできることがある、という意識変化が起きました。現在の活動などに人形浄瑠璃を組み入れると思わぬ化学反応が起こるのでは！と期待にわくわくしています。

昔から文楽が大好きだったので参加して本当に良かったです！ワークショップでは、いろんな世代の人の考えを知ることができ、人の集まる場の共有がいかに大切かを感じました。今まで以上に、自分の見たこと、感じたことを発信していきたいと思います。

ワークショップは初めての経験でしたが、伝統芸能という枠にとらわれない意見がたくさん出たことがとても楽しかったです。自分の地元のブンカについて考えたことがなかったので、とてもいいきっかけになりました。今の時代の感覚というものも考えながら、変革していく必要もあるんだなと感じています。まずは知ることが大事！地元の歴史やブンカに興味を持ったことがなかったので、そこから若者としての感覚をもって、「カッコよく」発信していきたいです！

地域のブンカを知るきっかけになって良かったです！浄瑠璃の公演を観られたことがとても楽しかったです！さらに、ワークショップでは、ブンカは地域の課題や魅力が「見える化」されるもの、という意見がとても印象的でした。

人形浄瑠璃だけでなく、ブンカという観点で話をできたので、とても盛り上がりました！一番印象に残ったことは太夫さんの迫力！ブンカとは、人間性を表現するもの。その方法はいくらでも時流に合わせて良いんですね。観る・知る・感動を共有することの大切さを感じました。

workshop

talk session

人形浄瑠璃の公演のあと、実際に人形座の方々などから人形浄瑠璃の魅力とこれからに向けたお話をうかがい、まちのブンカをまちづくりに活かすためのアイデアを話し合うワークショップを行いました。

大阪、徳島いずれの会場でもさまざまな世代や立場の方々が参加。多彩な意見の数々が飛び出し、ワークショップは大盛り上がり！人形浄瑠璃という伝統文化の枠を超えた、地域でブンカを活かすためのたくさんのアイデアが生まれました。

ワークショップの意見から、「まちのブンカ」づくりには、さまざまな方がさまざまな方法で文化活動に参加できるしくみが必要なこと。参加の枠を広げ、多様なニーズに合わせた参加の段階を設けることで、楽しみや魅力が広がっていくということをみんなで共有しました。

地域の新しい魅力や価値を生み出すまちのブンカ。それを生みだすヒントと、そんなブンカの持つ無限の可能性を感じられた時間となりました。

まちのブンカ会議シンポジウム

ブンカと地域をつなぐ

日時 2015年2月22日(日) 14:00〜16:30
会場 あべのハルカス25F貸会議室
聞き手 林彩華(studio-L)

徳島県那賀町で地元の青年団が結成した人形座「丹生谷清流座」による寿二人三番叟からスタートした今回のシンポジウム。これからの人口減少社会において、どのようにまちづくりを進めていくべきか。そのための、伝統文化、地域、そして そこに暮らす人たちの在りかたとは。それぞれの視点でまちづくりに関わる方々をパネリストにむかえ、まちのブンカとこれからについて話し合いました。

みんなでひとつのものをつくり上げる 伝統文化が若者を刺激する

林(聞き手) まずは、文楽座をお辞めになり、今フリーの人形遣いとして活動する勘緑さん。地域の人形芝居とまちづくりの関係について、ご自身の活動から、どのようにお感じになっていますか。

勘緑さん(以下、勘) 文楽に在籍中から地元の徳島では20年くらい人形浄瑠璃の指導をしていましたが、徳島で国民文化祭があった2007年から本格的に農村舞台や人形座の復活に携わるようになりました。そんな中で、結成されたのが那賀町の丹生谷清流座です。

那賀町は山村の小さな町ですが、その中で青年団や消防団の人が集まって何かやろうとしたときに、町にある農村舞台を活用しようと、彼らは人形浄瑠璃を選びました。すぐに辞めると思っていましたが、なんと彼らがのめり込みまして。最初は面白がるだけの人や無理やり連れてこられた人までいましたが、取り組んでいるうちに、自分が人前で表現することに長けていることを発見したり、世の中や組織の中で役立っているという実感を持つことができた。役場の人が参加していたのも一因だと思いますが、やはり、まちの文化・資源である人形浄瑠璃や農村舞台が若者たちを刺激し、みんなでひとつのものを創って那賀町を盛り上げようという意識が生まれたんだと思います。

林 地域の文化を取り上げたことで、周囲も応援してくれるし、そこでやりがいを持てたんでしょうね。

次にこれも徳島県の例になりますが、出身地の現状をそのまま撮った映画「祖谷物語」を制作された蔦監督からもお伺いしたいと思います。

蔦さん(以下、蔦) 昨年劇場公開した「祖谷物語」は、徳島県の池田町(現在の三好市)の山奥にある祖谷地方という集落を舞台に一年かけて撮影した映画です。日本三大秘境でもある祖谷で暮らす人びとが自然に寄り添い、抗いながらたくましく生きている姿を描いているのですが、

「美しい田舎」というだけではなく、あえて自然の厳しさや観光化を目指す地元の人達と自然を守るべきという移住者の争いなど、僕が地域を見て思ったことを問題提起として描いています。

地元で制作実行委員会を立ち上げ、婦人会、猟友会、建設業の方々に協力いただき、少しは「地域づくり」ができればと思っていました。運良く多くの方に評価をいただき、劇場公開することができました。祖谷という場所を全国のみなさんに知ってもらえたと思います。

林 今、お二人からそれぞれの分野での取り組みについて、お話をいただいたところですが、さまざまな地域でまちづくりに取り組んでいる山崎さんからもお願いします。

山崎(以下、山) コミュニティデザイナーという聞き慣れない肩書きで、元気がなくなったまちの地域づくりのお手伝いを10年間してきました。といっても、我々が何か得策をもっているわけではなく、地域に住んでいる方々と一緒になって自分たちのまちを元気にしていく方法を考えています。

集落の話が先ほどから出てきていますが、これまで弱ってしまった集落に大学の研究室や行政が入って活性化しようとして、結局数年で終わってしまっていた。そういうことを日本の集落の方は何度か経験していることが多くて、そこに僕らが呼ばれると「また活性化っていうのか!」と言われる(笑)。

そこで僕らは、まず「このまちをどうするのかを決めましょう」という話をします。どの地域でも活性化ではなく、農村の文化や集落の作法をしっかりと記録して閉じていくということ提案することもあります。浄瑠璃などの伝統文化や地域の文化をどうしていくのか、文化にどんな可能性があるのか、ということを考えていくべきだと思います。

共に生きる“ということの大切さ 文化は人が生きてきた歩みそのもの

林 ここで、鳥取県の円通寺の人形芝居についてもご紹介します。円通寺の人形芝居は農村地域の暮らしを歌った念力節で踊る舞が特徴です。今日は円通寺の坂根

パネリストの紹介

佐々木 雅幸
同志社大学特別客員教授

文化庁文化芸術創造都市振興室長、創造都市ネットワーク日本の顧問。2008年度から2010年度まで文化経済学会〈日本〉会長、2010年に国際学術雑誌City,Culture&Society(Elsevierから刊行)を発刊し、5年間編集長を務めた。主著に『創造都市の経済学』、『創造都市への挑戦』、編著に『創造農村』、『創造都市への展望』など。

勘緑
浄瑠璃人形遣い

人形浄瑠璃の普及・発展と文楽人形の新しい可能性を求めて、2012年1月、33年間在籍した文楽座を辞しフリーの人形遣いに。主宰する「木偶舎」での公演活動のほか、全国各地の人形芝居の指導・演出や、徳島県の農村舞台復活にも積極的に取り組んでいる。2008年4月から人形浄瑠璃とくしま座芸術監督。2009年徳島新聞文化賞受賞。

山崎 亮
studio-L代表

東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科教授。京都造形芸術大学空間演出デザイン学科教授。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、建築やランドスケープのデザイン、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。

蔦 哲一朗
映画監督

祖父は池田高校野球部の元監督・蔦文也。2007年製作「夢の島」で第31回ぴあフィルムフェスティバル観客賞を受賞、国内外から高い評価を得る。2013年に地元、徳島の祖谷地方を舞台にした「祖谷物語ーおくのひとー」を発表。東京国際映画祭をはじめ、トロムソ国際映画祭で日本人初となるグランプリを受賞。多くの映画祭に出品され話題となる。

坂根 政代
鳥取県鳥取市円通寺人形芝居保存会 事務局長

さんにお越しいただきました。

坂根さん(以下、坂)

私は20歳くらいの時に円通寺人形芝居に入っていたのですが、その時に前会長がよく言っていたのが「昔からうちの一座は、たとえ荷物持ちであっても巡業の給金は全員で平等に分けていた。みんな背景に家族がいるから。ただ演じるだけじゃなくて、一緒に生きてきたんだ」と。"共に生きる"ということが大切にされてきたのだと感動したのを覚えています。それから一度結婚・出産で離れて20年経って復帰した時に「どうして人形をしているのですか?」と尋ねたところ、その時は、「みんなが喜んで帰ってくれると自分も楽しくなれるから」とおっしゃったんです。喜怒哀楽が人形を使うことで浄化されるのだと思います。

円通寺の人形芝居は、江戸時代の末期に荒れていた村をなんとかしようと藤右衛門という村人が私財を投げ出して作ったそうです。生きる上での希望を求めて人形芝居が起された。そういうことを聞いていると、文化は形だけでなくて、生きてきた歩みそのものなのだと感じます。

伝統文化＝"守る"ではない 現代人の共感を得る変化が必要

林　人びとが生きる上で必要不可欠なものとして人形芝居のような地域の文化が発展したんですね。ですが、やはり今の問題として地域の文化を維持していくことの難しさがあると思いますが。

勘　本当に難しいですよね、考えれば考えるほど。徳島の限界集落は昔から芸能をよりどころにしていました。人形浄瑠璃一座の存続はできていますが、地域の活性化には今のところつながっていません。思い切り金目に走って、観光産業としてやったとしても、それが地域の成功と呼べるのかどうか…。

林　蔦監督はどうお考えですか?最近ではネット配信なども増え、映画館離れにつながっているという状況もありますが。

蔦　僕は、文化を"守る"ということが目的ではないと感じています。昔は、伝統芸能が憩いや出会いの場でした。それは映画館も同じで、デートスポットだったはずなのに、そこから離れてしまっている。

例えば、徳島にはもうひとつの伝統芸能「阿波おどり」があります。僕も地元が大好きで、地元に帰る理由のひとつが阿波おどりです。そして、僕が阿波おどりを見て感じるのは性の、エロの匂いがしているということ。映画にしても人が行きたくなる理由は結局エロだったりする。そういったところが伝統文化の中にも必要なんじゃないかと思います。

勘　うまいこと言いますね。確かに浄瑠璃も下世話な話が多い。そんなことしか描いていないですよ(笑)。人を好きになってこっちに向いてくれよと殺しにいったり、ストーカーしたり。若造が隣の奥さんにお金貸してくれといって断られ、怒って殺してしまって油まみれになるという話もあります。阿波おどりには男女の出会いの場がある。そんな魅力も必要ですね。

佐々木さん(以下、佐)

伝統文化がなぜ廃れるのか。それは今の感性と合わないからというのも大きい。今、伝統として残っているもののほとんどは、その当時は前衛だった。生き残るには変わり続ける何か、クリエイティブさが必要です。その努力を

怠るとやっぱり廃れていきます。今の人たちが伝統的なものをどのように表現するべきなのか、それこそ勘緑さんに率先してやっていただきたいですね。

勘　面白くないといけない、現代の人が共感するものでないといけない。円通寺さんが浄瑠璃じゃなく地元の民謡でやっているというのはその時はそれが流行っていたからこそ今まで続いているわけです。伝統は変革していくことで破壊もされない、守る事ばかりやっているからいけないのだと思います。

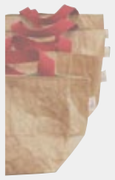
佐　まちづくりも同じようなことが言えます。同じ考えの人ばかりになってアイデアが出なくなると廃れてしまう。だとしたら新しい、風変りな人を連れてくるのはどうか。それで成功したのが徳島県の神山町です。最初はアーティスト・イン・レジデンスという取り組みからスタートしました。若いアーティストに村に滞在してもらい、自由に作品を作ってもらう。ネットで神山のアートが紹介され、今はアーティストやクリエイターからも「神山が面白いことをやっている」と評判になり、好循環ができているわけです。伝統文化とコミュニティの再生は結局一緒ですね。

地域の取り組みに参加してみる それが"まちのブンカ"を創る

勘　地域の文化を育てるキーワードのひとつに"郷土愛"があると思います。私は那賀町の一番奥の集落で8年間お芝居をしていますが、そういった集落には自動車の修理から電気工事まで、一人でなんでもできるすごいおっちゃんがいるんです。最初はおっちゃんたちに「勘緑といいます」と酒をぶら下げていって飲み外交からはじめて、地域に参加していく。信用されて打ち解けるとおっちゃんたちはすごい。強い味方になってくれます。「ここのアメゴは旨いんだよ」と、そんなことをおせっかいに教えくれる人がいることが、コミュニティをつくる一番の方法です。その架け橋のような存在に人形浄瑠璃がなりはじめているのではないのかなと思います。

山　参加していくことで郷土愛が深まっていくんだと思います。ここで蔦監督のおじいさんである池田高校の蔦文也監督の話をしたいです。蔦監督は池田高校の野球部監督になって30年で全国優勝へ導くわけですが、40年間ずっと同じ高校の教員だったんです。県の教育委員会は必ず何年かごとに先生を異動させなくてはならないので普通はありえないこと。教育委員会の粋な計らいもあって、池田高校の全日制と定時制を交互に異動させていたのだそうです(笑)。みんなが監督には「いてもらわなくてはならない」と、池田高校野球部が強くなって、全国で名を馳せると信じていた。つまり地域の方々が参加していたんです。もちろん野球をするのではなくて、応援するために試合を見に行って、体感して、参加していたから、池田高校のプロジェクトを応援できた。これはまさに"まちのブンカ"ですよね。伝統文化でも地域文化でも一緒だと思います。

NEXT



人をつなげる伝統文化を活用し、クリエイティブに人口減少社会を生きる

林　それでは最後に今日の感想をそれぞれおうかがいしたいのですが。

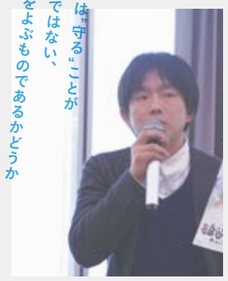
蔦　僕が出来る具体的なことは、映画を作り続けて、郷土愛を育むことで、これから徳島に貢献できたらと思っています。

勘　人形浄瑠璃は本当に面白いです。後継者をなんとか増やして人形浄瑠璃を"今に生きている演劇"にしたいと思ってます。人形浄瑠璃はやればやるほど、観れば観るほど面白い。ただ、その面白さを知ってもらえるよう、浄瑠璃もどんどん変わっていくべき。400年も変わらない芸能があることがおかしいのです。コミュニティや地域が芸能でよくなっていくのなら、僕はどこにでも行きます。

佐　今、関西広域連合と関わりながら2020年の東京オリンピック・パラリンピックにむけた文化プログラムについて考えています。2012年のロンドンでは文化プログラムが行われ、4,300万人の市民が参加したと言われています。そんなことを東京オリンピック・パラリンピックでもしたいと文化庁の人たちは考えています。これをやるためには勘緑さんのような人が1,000人は必要になってきます。ぜひみなさん、このサポーターになっていただきたいですね。

山　専門家によると4,000万人から3,500万人くらいが日本の適正な人口だと言われています。これからはいかにクリエイティブに人口減少社会をつくっていくかが課題になります。ポイントは都市と地方の人口比率です。戦前まで、日本では人口の80%が地方に住んでいて、都市は20%でした。しかし戦後、それが逆転してしまった。人数が減っていくというのは昔に戻っているように見えますが、実際には地方にもう一度、人口を還流させないと幸せな国には戻れない、次の70年も都市に人口が集中する状況のまま生きていくことは難しいと思います。人口が減ることは自然な流れだとしても、もう一度地方の活力や可能性を信じて、そこで仕事をして生活していこうと思わせる、またその人たちがつながるきっかけとして、人形浄瑠璃のような地域の伝統文化をうまく活用できればと思います。

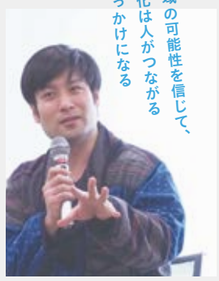
END



文化は"守る"ことが目的ではない、共感をよぶものであるかどうか

人形浄瑠璃を"今に生きている演劇"に

文化の革新には、クリエイティブな人材とサポーターが必要



地域の可能性を信じて、文化は人がつながるきっかけになる

同時開催

人形浄瑠璃×縁活

シンポジウムに合わせて、あべのハルカス近鉄本店内コミュニティスペース「街ステーション」で縁活とのコラボレーション企画を開催しました。

人形浄瑠璃×ピクニック書道

三味線と太夫の節回しが響く店内。街ステーションには入りきれないほどのお客さんがつめかけ、徳島の人形座「阿波人形浄瑠璃研究会青年座」による人形浄瑠璃が上演されました。演目は、寿二人三番叟と書道にちなんだ外題「生写朝顔話」(抜粋)。

三味線と太夫は、鶴澤友輔さんによる弾き語り。演目に合わせて、ピクニック書道の髙橋千枝子さんによる書道の実演も！書道と人形浄瑠璃、双方の魅力を感じることのできるプログラムとなりました。

人形浄瑠璃×縁活WALL GALLARY

関西各地の人形浄瑠璃芝居を守る多くの方々を実際に訪ね、取材してきた内容をパネル展示しました。

縁活とは

市民活動団体・地域のみなさん・ボランティアと百貨店が一緒に、楽しくて、社会をちょっと良くする活動を行う百貨店の取り組みです。

http://www.en-katsu.info

参加者の声

Q 印象に残った言葉！

「郷土愛」

「文化を通じて人がつながることが一番大切」

「文化は生活の一部であり、社会を変える力がある！」

「参加・体験してもらうことが重要である」

「ブンカの再生は地域の再生になる」

「技術向上が文化持続させることにつながる」

Q わたしたちにとって地域のブンカとは？改めて考えて、感じたことを教えてください

- 郷土愛を深めるきっかけをくれるもの
- 伝統文化の本質は楽しみということを改めて感じた。変わることの大切さも。
- やはり見ること、体験することが大切だと感じました。
- 伝統文化を「理解する感性」の下地をどうつくれば良いのか。そこが肝だと思った。
- 自分のまちには、浄瑠璃のように誇れるような文化があるのかどうか。まずは地域を知ることが大事だと感じた。
- 参加型、共感して同志をつくることが大切！
- 自分のまちにどれだけ人と人が関わるしくみをつくれるか、自分ができる小さなことから一つひとつ取り組んでいきます。

人・まち・ブンカ

ブンカでつなぐ
人と時代とコミュニティ

発 行 日　平成27年3月

発　　行　関西広域連合「文化の道」実行委員会
〒602-8570
京都市上京区下立売通新町西入 京都府文化政策課内
TEL:075-414-4217 FAX:075-414-4223

協　　力　特定非営利活動法人阿波農村舞台の会

企画・編集　株式会社studio-L

平成26年度文化庁文化芸術振興費補助金
(文化遺産を活かした地域活性化事業)

※本誌内容の無断転記、転載、複写はご遠慮ください。